

可変的シラバスを用いた日本語教育の可能性

—短期集中コースの実践例より—

Possibility of flexible syllabus in Japanese education : from the practical example of an intensive
Japanese language training course

白川繁子 ((財) ひろしま国際センター)・犬飼康弘 ((財) ひろしま国際センター)
SHIRAKAWA Shigeko (Hiroshima International Center), INUKAI Yasuhiro (Hiroshima
International Center)

要 旨

プレイスメントテストなどによるコース開始前のレベル分けが困難な短期集中講習において、学習背景もレベルも異なる学習者を、授業が始まってから先行タスクによってレベル判定し、学習を進めていくことができる可変性を持ったシラバスを開発した。これにより、学習者の授業に対する満足度は非常に高くなった。この可変的シラバスを用いた実践を行う中で得られた成果と新たに生まれた課題について検討し、その応用範囲を探りたい。

Considering the difficulties of splitting student levels using a placement test and background documents before the start of short term intensive courses, we have developed a syllabus with the capacity to help determine the differences in levels and background of students once the course has already started, using a range of preliminary tasks. Thanks to this approach, the level of satisfaction of participants towards the course rose significantly. We would like to discuss the insights and research questions obtained through putting this flexible syllabus into practice, as well as consider other possible applicable areas.

【キーワード】 可変性, 談話要素, バリエーション, レベル差, コースデザイン

1. はじめに

(財)ひろしま国際センター(以下HIC)では、1997年から広島県からの委託を受け、JETプログラムで来日した英語指導助手等を対象とした短期集中日本語コース(以下、本コースと呼ぶ)を実施している。

以下では、まず、本コースの概要と課題について述べる。

2. コースの概要と課題

まず、本コースの期間であるが、広島県との委託契約により、5日間20時間と限られた時間となっている。そのため、この短期間において、どのような方向性で、どのような授業内容とするのが、最初の課題となる(課題1)。

また、授業内容を選定するためには、日本語レベルの把握が不可欠であるが、前田他(1999)がJET青年について報告している通り、本コースにおいても、日本語学習経験がゼロのものから母国の大学において日本語を主専攻として学び1年以上の留学経験があるものまで、様々であり、来日経験についても、前述の通り留学経験がある者から初来日の者ま

で多様である。そのため、例年、40人から60人の学習者をレベル別に5クラスに分け実施しているが、1つのクラス内にもレベル差が生じてしまい、これにどのように対応していくのかが次なる課題となる(課題2)。

このレベル差が生じるもう一つの原因として、学習者の来日日程の問題が挙げられる。本コースの学習者は、毎年A, B, C⁽¹⁾の3つのグループに分かれて来日するが、A日程の場合、本コース開始3~4週間前に来日し、各種オリエンテーション後、赴任地で2週間程度生活してからコースに参加する。そのため、その間に日本語の学習を進めたり、生活体験の中で日本語を聞く機会を得る者も少なくない。一方、B日程の場合、本コース開始2週間前に来日し、オリエンテーションを受けた後、赴任地の様子をあまり把握できないまま本コースに参加することとなり、事前に日本語学習を進める時間的な余裕はA日程に比して少ない。

そのため、来日後のオリエンテーションの際に、レベル差を把握するための事前調査を行っているのだが、必ずしも、本コース開始時の日本語能力を正確に反映しているとは限らないという問題も生じていた(課題3)。

3. 過去のシラバスにおける課題

2. で示した課題は、研修成果に様々な影響を及ぼすこととなる。その影響について、過去の取り組み事例を基に以下で説明する。

3-1. 過去のシラバスと実践

本コースでは過去、様々な取り組みを行ってきたが、特に来日初期の段階においては日常生活場面での口頭発話能力のニーズが高い(前田他, 前掲)ことから、2007年度以降、全クラスで場面シラバスを採用した。この場面シラバスは、縦糸に「場面」をとり、横糸に「文法」を置くタイプ(稲垣他, 1991)のものであった。また、扱う場面はレベルによって異なり、各クラス共通とはしなかったが、授業展開については、各クラスとも、その日に扱う場面のビデオ教材を視聴し、その後それぞれの場面における表現を確認、練習した上で、日本人学習パートナーと会話練習を行うという流れで実施した。

このようなシラバス・授業展開によって実施した結果、表1のような、進捗・難易度に関する問題点と、授業内容に関する問題点が学習者から指摘された。

表1 自由記述コメント(2008年度：一部抜粋)

<p>進捗・難易度に関する記述</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ちょっと難しい時と簡単な時があった。 ・私には少しゆっくりだった。 ・時々クラスの進み方が遅かったです ・すべてとてもスピードが速く、私には、「泳ぐか沈むか」というところへ投げ込まれたように感じた。 ・日本語のう力はいろいろだったのでクラスがよくながれない時は時々あった。(原文ママ)
<p>授業内容に関する記述</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・このクラスの目標は口頭でのコミュニケーションではあるが、わたしはもっと文法的な要素をくみいれてほしい。 ・いくつかの表現は教科書的であまり役に立たないと思う。 ・グループでの活動を減らし、文法をもっと学習したい。

3-2. 過去のシラバスにおける課題

表1に見られる指摘は、根本的には2. で述べた課題1~3に起因すると思われるが、特に以下の2点が具体的に解決すべき問題として挙げられた。

- (1) 学習者のレベル・レディネス等に関する正確な情報入手が困難な状況で、難易度・進度の調整をどのようにしていくのか
- (2) 20時間という限られた時間の中で、どのように学習者の満足度を高めていくか(コミュニケーション能力を重視していくのか、それとも文法的な学習をしたいという要望を満たしていくのか)

この2点の問題点のうち、(1)については、過去のシラバスでは場面シラバスに沿ったテキストにある固定的な会話を覚えることが中心となってしまっていたこと、また(2)については既に日本で生活したことのある学習者はその経験から教科書的な会話は実践的ではないと感じていることが主な原因と考えた。

そこで、これらの問題点を解消するため、シラバスに可変性を持たせること、自然な会話が学習できることの2点をポイントに、シラバス、教材開発を行なった。

4. 可変性のあるシラバスの設計

4-1. シラバス変更のポイント

シラバス作成に当たって、まず、限られた時間内で、どのような方向性で、どのような授業内容とするのかということ、委託元である広島県とも検討した。その結果、「日本の学校での業務を含め、滞日生活を円滑に始められること」を目的として掲げることとし、そのために必要となる場面として、「自己紹介」「買い物」「食事」「電話」を選定、事前調査に基づきレベル別に5つのクラスに分けることにした。

また、既に日本での生活を始めている学習者もいることから、それぞれの場面における具体的な内容や表現にはバリエーションを持たせることとし、日本語レベルやニーズに合わせて柔軟に対応できるよう配慮した(具体的な場面については、下表参照)。

表2 場面と具体的な内容(一部抜粋)⁽²⁾

場面	内容
自己紹介	校長室・職員室での自己紹介, 教室での自己紹介, 保護者会での自己紹介
買い物	売り場を聞き, 買物をする 売り場を聞き, 商品を確認, 他の選択がないか店員に確認した上で購入する 売り場を聞き, 支払い方法を確認したり, 包装の依頼などをして購入する 購入したものについて返品, 交換を求める
食事	ファストフードのお店で食事する 友人と共にレストランで食事する 上司に誘われて, 食事する 同僚にお勧めの店などを相談した上で, レストランなどで食事する
電話	理由とともに欠勤を伝える 理由と共に遅刻を伝え, 到着予定時刻を知らせる レストランを予約する 予約を断ったり, 変更したりする

場面選定の後、各場面を、より自然で有用感のあるものにするため、該当する場面において実際に行われる言語行動を検討した。その上で、全ての発話は多くの機能を有しており、何らかのメタコミュニケーションの機能を伴う(スタップス, 1989)ことから、発話例を基に各場面を「談話要素」として細分化した。

次ページの表3に友人へのプレゼントを買いにデパートへ行ったと仮定して展開される会話例(電器店コーヒーメーカー売り場)を示す。これは、売場を探すところから始まり、商品の選定、購入、購入した商品の交換まで想定したものである。表3にある通り、例えば、売場を探す際には「呼びかけ」たり「確認」を行ったりすることが考えられる。また、商品を選定する際には「値段を聞く」、手に取ってみるための「許可を求める」ことも行なわれる可能性がある。

こうした、「呼びかけ」「確認」「許可を求める」等を「談話要素」として設定し、この「談話要素」を成立させるための表現例を「基本表現」とした。

この「談話要素」は、一旦、表3のような配列にしたが、決して固定的なものではなく、並び替えが自由なものでもある。実際に、「値段を聞く」前に手にとって良いか「許可を求める」こともあり得るし、「値段を聞く」の後に「支払方法を伝える」ことも可能である。もちろん、不要であると判断すれば発話する必要もない。

このように、入れ替え可能な「談話要素」と「基本表現」を設定することにより、より実践的な会話例となるよう、変更を加えた。

4-2. レベル差への対応

このように、自然な会話となるように変更を加えた結果、必然的に難易度が上がることとなる。しかし、買い物をする上での最低限の必要性という点においては、表3の網掛け部分のみの発話ができればよく、「談話要素」を減らすことによって、難易度の調整が可能であると考えた。また、「基本表現」についても、例えば「値段を聞く」際に、「この～は、おいくらでしょうか」から、単に「いくらですか」と尋ねられるように、幾つかのバリエーションを設定した。

このように「談話要素」および「基本表現」のバリエーションによって、レベル差への対応を検討した。

表3 買い物場面における会話例
電器店（コーヒーメーカー売り場）

	客側	店員側の応答例
「談話要素」	「基本表現」	
呼びかけ	あの～すみません	(はい)
目的・用途を伝える	プレゼントを買いに来たんですけど、	
売場を聞く	コーヒーメーカーが欲しいんですが、家電売り場を教えてくださいませんか	(家電売り場なら3階です)
確認する	3階ですか	
お礼を言う	ありがとうございました	
値段を聞く	このコーヒーメーカーはいくらですか	(12000円です)
勧められたものを断る	12000円ですか… 便利そうですが、ちょっと高いですね	
質問する・要望を述べる (値段・色など)	もっと安いのはありますか	(それでしたら、こちらはいかがですか。7000円です。とても人気のあるメーカーです)
許可を求める	いいですね ふたを開けてみてもいいですか	(ええ、どうぞ)
(質問の繰り返し)	他の色もありますか	(はい、赤と白があります)
	ミルはついてますか できればミルがついているものがほしいんですが…	(はい。ついてますよ。ミルもついてこの値段はお買い得だと思います)
購入する／しない を告げる	じゃあ、これにします／少し大きいですね…。もう少し考えてみます	(ありがとうございます)／(わかりました)
依頼する(配達・包装)	プレゼント包装をお願いしたいんですが	(かしこまりました。お待たせしました)
支払方法を伝える	カードを使えますか	(はい、大丈夫ですよ)
お礼を言う	どうもありがとうございました	
呼びかけ	すみません	
要望を述べる	これ、交換したいんですが、できますか	
理由を言う	プレゼント用に友達に買ってあげたんですが、白の方がいいらしいんです	(そうですか。レシートはお持ちですか)
お礼を言う	お手数をおかけしました ありがとうございました	

この、「談話要素」「基本表現」を縦軸に、表現のバリエーションを横軸に構成したシラバスの例(買い物場面)を次ページ表4に示す。表現のバリエーションは、難易度および使用頻度を考慮し、レベル1～レベル5の5段階に便宜的に振り分けた。

表4 シラバス表（買い物場面）

	談話要素	基本パターン	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
売り場を知る	呼びかけ	(ちよつと)すみません	(ちよつと)すみません	*あの～、すみません…	*あの～、すみません…	*あの～、すみません…	*あの～、すみません…
	目的・用途を伝える。	〇〇が欲しいんですが。				*〇〇を探しているんですが。	・〇〇を探しているんですが。 *〇〇に使う、口口が欲しいんですが。 *〇〇に使う、口口を探しているんですが。
	売り場を聞く	〇〇はどこですか。	〇〇はどこですか。	〇〇はどこですか。	*〇〇、ありますか。 *〇〇は、どこにありますか。 *～売り場はどこですか	・〇〇、ありますか。 ・〇〇は、どこにありますか。 *〇〇は、どこにおいでいますか。 *〇〇売り場を教えてください。	・〇〇、ありますか。 ・〇〇は、どこにありますか。 ・〇〇は、どこにおいでいますか。 ・〇〇売り場を教えてください。 *〇〇売り場を教えてくださいませんか。 *〇〇売り場を教えてくださいませんか。
	確認する	〇〇ですね。	〇〇ですね。	〇〇ですね。	〇〇ですね。	〇〇ですね。	〇〇ですね。
	お礼を言う	ありがとうございます。	ありがとうございます。	・どうも、ありがとうございます。	・どうも、ありがとうございます。	・どうも、ありがとうございます。	・どうも、ありがとうございます。 *どうも。
買う	値段を聞く	〇〇はいくらですか。	〇〇はいくらですか。 [これ・このN]はいくらですか。	〇〇はいくらですか。	〇〇はいくらですか。	〇〇はいくらですか。	〇〇はいくらですか。
	確認する	〇〇ですね。	〇〇ですね。	〇〇ですね。	〇〇ですね。	〇〇ですね。	〇〇ですね。
	勧められたものを断る	これはちよつと…		これはちよつと…	*ちよつと〇〇ですね。 *～すみません	*ちよつと〇〇ですね。	*口口ですが、ちよつと〇〇ですね。
	質問する・要望を述べる (値段・色・サイズ・デザイン)	〇〇はありますか。		〇〇はありますか。	*もっと〇〇のがありますか。 *もっと〇〇のが欲しいんですが。 *もっと安くありませんか /してください	もつと〇〇のがありますか。 もつと〇〇のが欲しいんですが。 薬 *～でもいいですか。	・もつと〇〇のがありますか。 ・もつと〇〇のが欲しいんですが。 電化製品 [機能]はありますか。 [機能]はついていますか。 薬 ・～でもいいですか。
	許可を求める	～でもいいですか。			～でもいいですか。 *ためしてもいいですか	～でもいいですか。 *ためしてもいいですか	～でもいいですか。 *ためしてもいいですか
	購入を告げる	〇〇(を)ください。	〇〇(を)ください。	〇〇(を)ください。	*〇〇にします	*〇〇にします	*〇〇にします
	購入しないことを告げる	少し考えてみます。			*ちよつと考えさせてください。	*ちよつと考えさせてください。	・ちよつと考えさせてください。 *〔理由〕ので、ごめんなさい。 *〔理由〕ので、まだにします。 *〔理由〕ので、少し考えてみます。
	依頼する(包装・配達)	〇〇をお願いします。				*〇〇お願いしたいんですが。 *配達できますか /してもらえますか	・〇〇お願いしたいんですが。 *～していただけませんか。 *～していただけませんか。 *～していただけたいんですが。
	支払い方法を伝える	〇〇でもいいですか。				*〇〇を使えますか。 *〇〇でお願します。 *〇〇、大丈夫ですか	*〇〇を使えますか。 *〇〇でお願します。 *〇〇、大丈夫ですか
	お礼を言う	ありがとうございます。	ありがとうございます。	・どうも、ありがとうございます。	・どうも、ありがとうございます。	・どうも、ありがとうございます。	・どうも、ありがとうございます。 *どうも。
返品・交換する	呼びかけ	(ちよつと)すみません。					基本
	要望を述べる	返品・交換したいんですが。					・返品したいんですが、できますか。 ・返品したいんですが、大丈夫ですか。 ・交換してもらいたいんですが、できますか。 ・交換してもらいたいんですが、大丈夫ですか。 ・交換していただきたいんですが、できますか。 ・交換していただきたいんですが、大丈夫ですか。
	理由を言う	～んですが。					・～ので。 ・～で…
	お礼を言う	ありがとうございます。					・どうも、ありがとうございます。 ・すみませんでした。ありがとうございます。 ・お手数お掛けしました。ありがとうございます。

以下では、このシラバスを用いた、具体的な授業展開について述べる。

4-3. 授業の進め方

可変性を持ったシラバスの特性を生かすため、授業ではロールカードなどを用いた先行タスクを取り入れた。授業担当者は、この先行タスクの結果を基に、授業内に大まかなレベル判定を行い、学習者に余力があるか、あるいは関連する質問が出るか等の様子を見ながら、「談話要素」を増やす、または、表現のバリエーションを増やすといった選択をしていく。また、逆に難易度が高いと感じる学習者に対しては、「談話要素」や表現のバリエーションを制限する等して対応することとなる。

これらを模式的に表したのが、図1である。

設置された5クラスは、それぞれ初期に想定するレベルはあるものの、実際のクラス構成員のレベルは、図1で示したようにグラデーションになっており、一様ではない。そのため、授業内容(学習する場面)によって、もっともレベルが高いとされるEクラスと、中間レベルと判断されたCクラスが同様の内容となることも想定される。

従来の固定化されたシラバスでは、Eクラスに配置された学習者はEクラスの内容を学

習するしかなく、その結果、難易度が高いと感じたり、逆にCクラスの学習者が簡単すぎると感じたりしていた。

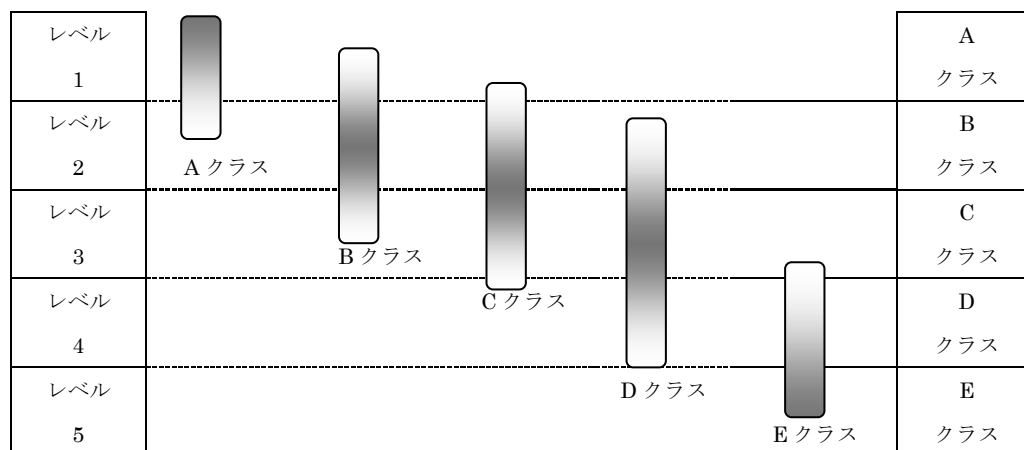


図1 レベル設定の模式図

しかし、このようにシラバスに可変性を持たせることにより、より柔軟に対応できるようになった。また、全クラスが同一場面を学習しているため、クラス変更も容易となる等のメリットが見られた。

4-4. 教材

シラバスに可変性を持たせた結果、当然の帰結として、教材にも可変性が求められた。そこで、本コースにおける教材についても、変更を加えた。

具体的には、図2に示す「語彙リスト」と、図3に示す表現ノートを作成した。

図2の語彙リストはその場面で必要となる語彙が示されており、辞書的機能も兼ねることから、授業が始まる前にレベルに関係なく同じものを全員に配布する。図3の表現ノートには「基本表現」と「談話要素」のみが書いてある。空欄部分には学習者が必要だと思ったもの、語彙やバリエーションなどがメモできるようになっている。

Shopping							
<p style="text-align: center;">買い物 (kaimono) Shopping</p> <p style="text-align: center;">Delivery・Wrapping</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住所(jūsho) : address ・国内(kokunai) : domestic ・無料(muryō) : free ・箱(hako) : box ・自宅用(jitakuyō) : for your own ・包装紙(hōsōshi) : wrapping paper ・配達先(haitatusaki) : destination, receiver ・のし(noshi) : Japanese gift wrapping paper ・配達料(haitatsu ryō) : delivery charge ・簡易包装(kanihōsō) : simple wrapping ・包装(hōsō)/ラッピング(rappingu) : wrapping ・ビニール袋(binirū bukuro) : plastic bag ・配達(haitasu) : delivery ・国外(kokugai) : international ・テープ(tēpu) : tape ・紙袋(kamibukuro) : paper bag ・贈り物(okurimono) : gift 	<table border="1"> <tr> <td>Typical expression</td> <td>〇〇お願いします (〇〇 onegaishimasu)</td> </tr> <tr> <td>Talking point</td> <td>Request (packing, shipping)</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="height: 100px;"></td> </tr> </table>	Typical expression	〇〇お願いします (〇〇 onegaishimasu)	Talking point	Request (packing, shipping)		
Typical expression	〇〇お願いします (〇〇 onegaishimasu)						
Talking point	Request (packing, shipping)						

図2 語彙リスト

図3 表現ノート

この表現ノートは「談話要素」を扱う際には、そのつど、教師が学習者に配布した。これは全クラス共通のものであり、異なるのは配布される「表現ノート」の枚数である。例えば買い物場面であれば最大19枚の表現ノートの配布が可能であり、授業担当者がクラスのレベルに合わせて扱う談話要素の数だけ配布した。

これらの教材を用いて、図4のように授業を展開していった。図4は授業の流れを示すものである。

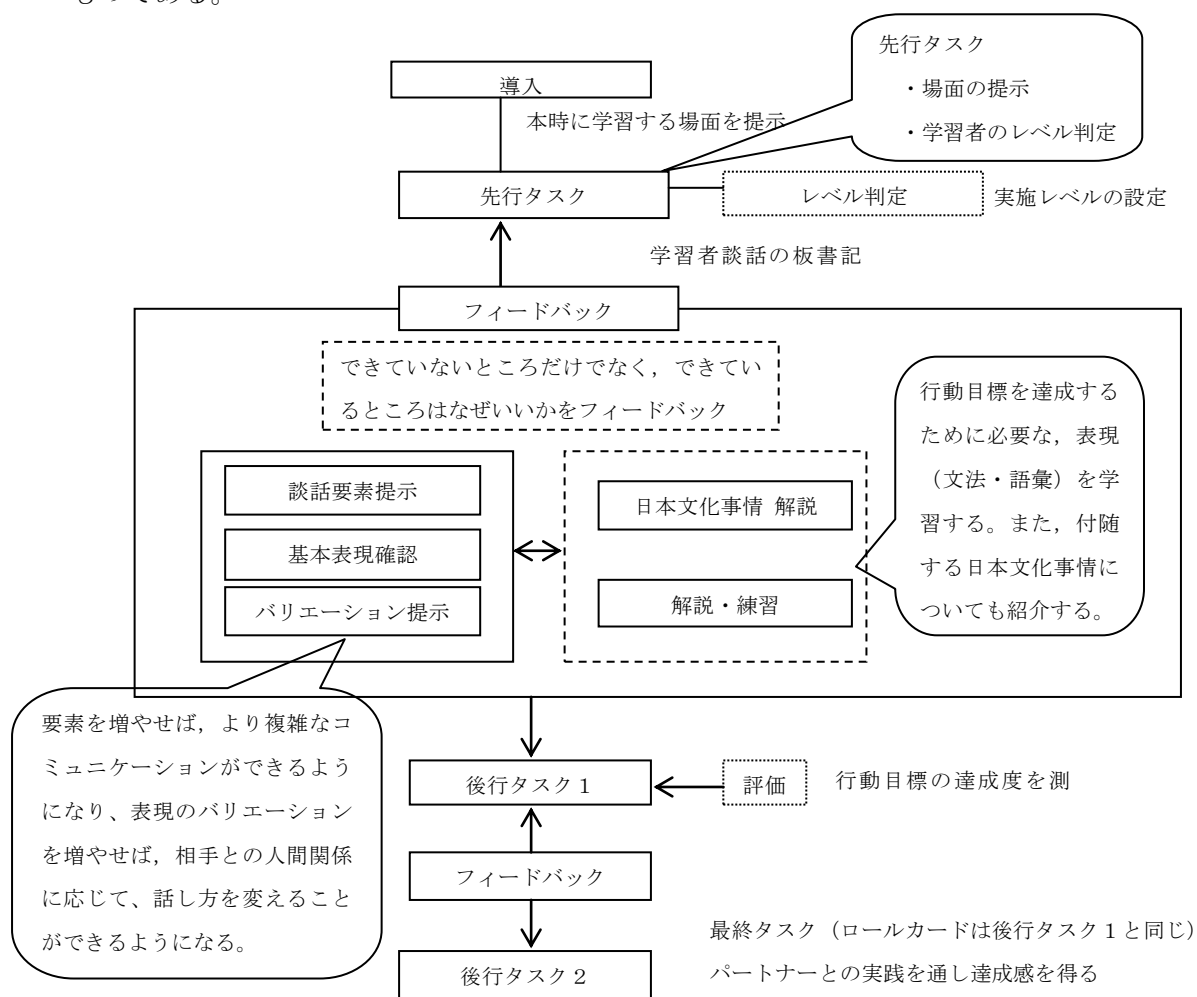


図4 授業の流れ

このようなシラバス、教材、授業展開で授業実践を行った成果と課題を以下で示す。

5. 成果と課題

5-1. 成果

可変性をもった新シラバスを開発したことにより、学習者より、表5で示したような評価が得られ、2. で述べた課題の改善に一定の成果があったことが確認された。

特に、ある文法項目を取り上げたわけではないにも関わらず、「文法の練習が含まれていた」といったコメントが見られた点が興味深い。

表5 自由記述コメント(2010年度：一部抜粋)

シラバスについてのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・授業で扱った場面は実践的だった ・説明には役に立つ文法の練習も含まれていた ・このコースは多くの場면을扱っていてよい。 ・言語の構造は役に立つ
日本語運用についてのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・私はほとんど日本語を知らなかったが、今は文法や語彙について知識があり、いろいろな場面で使うことができると思う ・まだ学習しなければならないが、学習した状況は使えると思う ・私はすでに1年ここに住んでいるが、このコースで私のコミュニケーション能力は向上した。 ・このコースは非常に有用で、ここで学んだことをきつと使うと思う。

松岡・宮本(2003)は、地域で生活する外国出身者は言語機能、場面などに即した表現を学習項目として捉えていること、コミュニケーションのフレームとなる文化・習慣的要素を学習項目として捉えていることが全体的な傾向としてであると述べ、その上で、文法の知識があっても、どれをどのように使用するかという言語運用の知識と使用する技能がなければ、現実世界での言語運用は不可能であると述べている。また、白井(2008)は、身近な内容について意味と形式の両方に注意を払って自然なコミュニケーションをしていけば、比較的短時間で限られた文法、単語を使って、限られた内容について流暢なコミュニケーションができるようになることを指摘している。

可変的シラバスを用いた本コースの授業では、「談話要素」により「どれをどのように使用するか」を、言語使用の文化・習慣的要素と共に示し、表現のバリエーションを提示した。これにより、学習者は限られた範囲ではあるが使用可能と認識できる表現を手に入れることができたため、上記のようなコメントが得られたのではないかと考えられる。

授業で扱っている内容はすぐに使える、実践的であるといったコメントも、これを裏付けるものであると考えられる。

しかし、完全にクラス内レベル差をゼロにすることはできないため、扱う内容によっては学習者が興味を持つことができないということも起こっている。ゼロにすることができないクラス内レベル差についてはどこまで減らすことができるのか、また、どこで妥協をするのか判断に迷うところである。

5-2. 課題

以上のように、可変的シラバスは、学習者には概ね好意的に受け入れられている。一方で、新シラバスでは学習者の様子を観察しながら実際に授業を行うレベルを授業担当者が決めていくため、場合によっては、教室現場で難しい判断をしなければならないこともあった。また、事前にレベルが確定していないため、準備が煩雑になる等の負担が増大し、学習者からの評価が高まる一方で、授業担当者のストレスは増大している。

学習者からの満足度が向上していることから、この方向性を大きく変えることなく、授業担当者の負担を軽減していくことが課題となる。特に、先行タスクの際にレベル判定の基準となるポイントを明確にしていく必要があると考える。また、実践を踏まえつつ、各場面における談話展開、表現のバリエーションの配置等を検討していくことも必要である。

このような課題があるが、前述の通り、レベル、レディネスの事前把握が困難な学習者

に対しての対応という点では一定の成果が見られた。このようなレベル、レディネスの事前把握が困難な現場の一つに、地域の日本語学習支援が挙げられる。地域には多様なニーズを持つ日本語学習者が存在することが指摘されている一方で、日本語学習支援の具体的な方法があまり議論されていない(牲川, 2006)のが現状である。

現在作成されている可変的シラバスおよび対応教材は、限られた場面のものでしかないが、今後、扱う場面を増やしていくことにより、地域での学習支援の一助とできるのではないかと考える。そういった観点からも、今後さらに実績を積み応用可能性を検討していく必要があると考える。

謝辞

新シラバスの作成、教材開発、ロールカード作成に当たっては(財)ひろしま国際センター専任講師の黒田類さん、現在は台湾国際交流協会台北事務所に所属している中川美保さんに大変お世話になった。また、100種に及ぶロールカードの英訳に当たっては、2011年7月31日まで広島県の国際交流員であったGregory Beck氏の全面的な支援を受けた。ここに改めて感謝を述べる。

注

- (1) C日程の場合、来日が本コース終了後のため受講できない。希望すれば翌年参加することができるが、その場合、1年間日本での生活を行ったのちに参加することになる。
- (2) 授業は5日間行われるが、設定したのは4場面である。これは、5日目にはスキット発表を行っているためである。また、場面選定の際には、学習者がリアクションするのが難しいため、主体的に働きかけることができる場面を想定している。

参考文献

- (1) 稲垣滋子・山本真紀代・中村壽子・野村美知子・丸山敬介・植松清(1991)「シラバス・デザイン」『日本語教育機関におけるコース・デザイン』日本語教育学会編 凡人社
- (2) 白井恭弘(2008)『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か—』岩波書店
- (3) 牲川波都季(2006)「『共生言語としての日本語』という構想——地域の日本語支援をささえる戦略的使用のために」『共生の内実批判的社会言語学からの問いかけ』三元社
- (4) マイケル・スタップス(1989)『談話分析 自然言語の社会言語学的分析』(南出康世・内田聖二 訳) 研究社
- (5) 前田綱紀・山下雅也・伊島順子・木谷直之・根津誠(1999)「JET青年の日本語ニーズ—『JET青年の日本語使用実態調査』より—」『日本語国際センター紀要』9号 国際交流基金
- (6) 松岡洋子・宮本律子(2003)「生活日本語コミュニケーション能力の構成要素—映像教材調査分析からの一考察—」『秋田大学教育文化学研究紀要 人文科学・社会科学部門』秋田大学